

若者の学びと思い

VOICE

若者がジェンダーについて学ぶ意義と 具体的なアクション

滋賀県立大学 人間文化学部 3回生
山村 悠理恵



近年、「ジェンダー」という言葉を耳にする機会が多くなったように思いますが、2030年までの国際目標であるSDGsの中にも「ジェンダー平等を実現しよう」が目標として掲げられています。ここでは、若者がジェンダー平等について学ぶ意義を考えたいと思います。

2021年3月に世界経済フォーラムが公表したジェンダーギャップ指数の日本の総合スコアは156か国中120位であり、先進国の中では最低レベルとなっています。現状ではジェンダー平等には程遠いことがわかります。

ジェンダー平等を実現することは、「自分らしさ」を認めることにつながると考えています。「女性だから家事をする」「男性だから理髪だ」というのは、これまでの固定観念にすぎず、各個人の本来の姿ではありません。個人の権利を尊重するためにも、性差別や男女間での不平等はもろろん許されません。私は一人ひとりの個性を性別にとらわれず認めるために、ジェンダーを学んでいます。

学校現場では、若者の教育によって、これまでの「当たり前」を変えていくことで、さらに先の時代の主役となる子どもたちにもジェンダー平等を理解してもらおうことができそうです。日常生活の「当たり前」に隠れていた「自分らしさ」を引き出すことのできる環境づくりが教育現場には必要なのではないでしょうか。

また、政策の意思決定の場に若者が参加することも重要ですが、政府や県に対し、選択的夫婦別姓や同性婚、性教育の充実、緊急避妊薬の市販解禁や就活セクハラをなくす対策など、ジェンダー平等に向けて今抱えている問題点をパブリックコメントや提言によって示すことで、実際に若い世代の声が反映され、政策改善の末に人権が尊重された暮らしを送ることができるようになります。

若者ならではの視点から声をあげることで、誰もが生きやすい環境づくりが進められるのではないのでしょうか。今、若者の世代から一歩踏み出すことが必要です。

教員を対象とした アンコンシャスバイアス研修プログラムの開発

立命館大学 生命科学部 4回生
水上 理雅



世界のダイバーシティ化に伴い、近年では「アンコンシャスバイアス（無意識の偏見・UB）」に注目が高まりつつある。アンコンシャスバイアスとは、誰もが潜在的に持っている先入観や思い込みのことを指す。育つ環境や所属する集団のなかで脳に刻み込まれ、既成概念、固定観念となっていくことで形成されるアンコンシャスバイアスの程度を測る潜在連合テスト(IAT)の分析結果を見ると、偏見に対する顕在下と潜在下の意識の間にはギャップが存在し、このギャップは人種、ジェンダー、障がい者など、様々な対象に向けられ、世界規模における社会問題にも繋がっている。SDGsによりダイバーシティが謳われる中、学校という小さな社会においても多様性と包摂性が課題であり、アンコンシャスバイアス研修の必要性を感じさせる一方、日本においては一部の企業及び地方自治体のみUB研修が実施されている現状である。実際にジェンダーに関する研修を受けた教員はLGBTに関する悩みを持つ生徒の存在に気づきやすいというデータがあるこ

い、近年では「アンコンシャスバイアス（無意識の偏見・UB）」に注目が高まりつつある。アンコンシャスバイアスとは、誰もが潜在的に持っている先入観や思い込みのことを指す。育つ環境や所属する集団のなかで脳に刻み込まれ、既成概念、固定観念となっていくことで形成されるアンコンシャスバイアスの程度を測る潜在連合テスト(IAT)の分析結果を見ると、偏見に対する顕在下と潜在下の意識の間にはギャップが存在し、このギャップは人種、ジェンダー、障がい者など、様々な対象に向けられ、世界規模における社会問題にも繋がっている。SDGsによりダイバーシティが謳われる中、学校という小さな社会においても多様性と包摂性が課題であり、アンコンシャスバイアス研修の必要性を感じさせる一方、日本においては一部の企業及び地方自治体のみUB研修が実施されている現状である。実際にジェンダーに関する研修を受けた教員はLGBTに関する悩みを持つ生徒の存在に気づきやすいというデータがあるこ

い、近年では「アンコンシャスバイアス（無意識の偏見・UB）」に注目が高まりつつある。アンコンシャスバイアスとは、誰もが潜在的に持っている先入観や思い込みのことを指す。育つ環境や所属する集団のなかで脳に刻み込まれ、既成概念、固定観念となっていくことで形成されるアンコンシャスバイアスの程度を測る潜在連合テスト(IAT)の分析結果を見ると、偏見に対する顕在下と潜在下の意識の間にはギャップが存在し、このギャップは人種、ジェンダー、障がい者など、様々な対象に向けられ、世界規模における社会問題にも繋がっている。SDGsによりダイバーシティが謳われる中、学校という小さな社会においても多様性と包摂性が課題であり、アンコンシャスバイアス研修の必要性を感じさせる一方、日本においては一部の企業及び地方自治体のみUB研修が実施されている現状である。実際にジェンダーに関する研修を受けた教員はLGBTに関する悩みを持つ生徒の存在に気づきやすいというデータがあるこ

	国内事例 (埼玉県・教職員校内研修資料)	米国事例 (Univ. Wisconsin-Madison)
研修の目的	男女平等教育の推進	ジェンダー平等促進
受講者の目標	・ 一般的アウトプット目標 (男女平等教育についての認識を深める)	・ 具体的明確なアウトプット意識 (UBの科学的理解と対策戦略の修得)
主内容の構造	・ 現状格差データ、法的根拠、人権等をベースに男女平等を訴求 ・ 要因・メカニズム分析、対策検討の流れは読み取れない →「社会正義」アプローチ	・ IATで個々のUB明確化 ・ 現状格差データの主要因をUBとして、メカニズムや実証された対策を科学的に説明 →「科学」アプローチ ・ 平等促進行動の増進、女性雇用の割合等を測定、効果分析
効果の測定	・ 明示されていない	

(図1 平成31年度「次世代のライフプランニング教育推進事業」報告書より)

「生理の貧困」座談会に参加して

まずは正しい理解を

7月19日、大津市の県公館で大学生11人と三日月大造知事らによって「生理の貧困」についての座談会が開催されました。県が事前に行っていたアンケートに基づいて座談会は進行されました。実際どのような問題を抱えているかを学生側から発信し、実情とこれからの課題を共有することができました。

三日月知事はアンケート結果の背景にある社会像やジェンダー問題を分析する必要を示されました。また、県では今夏「女性のつながりサポート事業」を開始し、生理用品を提供したり相談支援窓口を設置したりし、生理を通じて抱える生きづらさを軽減する取り組みをすることでした。「個人差や年齢差、男女の違いがあるかもしれないが、知事として一緒に考えたい」「社会全体で理解や支援が広がれば」と意思を示されました。



知事との「生理の貧困」についての座談会

職場もありますが、「生理がつからなくて休みます」と言いがらうことによつて我慢をして出勤・登校するという人も未だに多いようです。根底には「生理」に対する社会の理解の浅さが見られるように思えます。また、症状については個人差が大きくあり、ほとんど痛みも出血量もない人もいれば、薬がなければ立ち上がることがままならない人もいます。必要なサイズが異なることによつて生理用品購入にかかる費用も違うし、服薬が必要な人にとつては高額な通院代や薬代もかかることになる。そして症状の軽い人と重い人との間で生理に対する正しい認識の違い、理解が深まらない原因のひとつもなっています。異性からの理解を得ることができない大きな課題ですが、異性間だけでなく同性間の理解を得ることも今後の課題と思われま。

この座談会の中で特に私の印象に残ったのは、生理にまつわる「知識の貧困」の存在についての話です。産婦人科は出産のことだけでなく、生理に関してもケアをしてくれるそうです。

それを周知させることで、生理不順など何かが起こった際に病院に行くことで適切に対処できます。

今回の座談会に参加し、発信することの重要さを切実に感じました。声をあげることで社会に変化を与えることができ、生理に対しての理解促進はもちろん、生理用品の無料配布、生理休暇の拡大など生理に悩むすべての人への支援が広がっていくのではないのでしょうか。この座談会の様子は新聞での支那が広がっていき、多くの人への取り上げられ、多くの人の目に留まったと思います。参加者のみならず記事を見た人も、各々が現状把握の上で自己の課題について向き合うことができたのではないのでしょうか。

私自身が今回の座談会で、「生理の重さ」に苦しむ人が予想以上に存在していることを知りました。「個人の問題であり、なかなか人前で話されることのないテーマ」と三日月知事が仰っていたとおり、友人間でもあまり生理の話をする機会がなかったため、PMS月経前症候群であることやピルを服用することは珍しいことだと思っていました。この座談会は自身の意識改革にも繋がりに、大変有意義な機会となりました。(山村悠理恵)

漫画
「気づこう！
ジェンダーバイアス」
の作者
滋賀県立大学
人間文化学部 3回生
田原 華